

白杵石仏群の造立年代とその背景について

—山王・ホキ三尊・古園を中心とした問題提起—

仲 嶺 真 信

一 造立年代諸説

まず、美術史の立場から、二・三の問題提起を行いたい。造立年代については、既に諸先学の諸説があるが、表1には、特に近年の成果のみを示した。本稿では、問題を簡明にするために、特に山王山、ホキ第二群第一龕、古園石仏群の三例のみに焦点を当て検討したい。

(1) 山王（山）三尊像

西川氏は十二世紀、渡辺氏は十二世紀後半。しかし、私は十一世紀後半〜十二世紀前半頃の造立と推測している。

(2) ホキ第二群第一龕・阿弥陀三尊像

造立年代について、西川氏は十一世紀、渡辺氏は、十一世紀後半〜十二世紀前半。西川氏は、古園石仏群及びホキ第一群第二龕よりやや遅いものと指摘。一方、久野氏は、十二世紀前半。この説は、自説の十二世紀前半〜十二世紀半ば頃（又は十二世紀後半・一一五〇―七〇年頃）と極めて近い。

以上が造立年代に関する諸説だが、なお仏師の系譜については、仮説として大雑把に述べるならば、山王石仏は円

表1 造立年代諸説（西川は、西川杏太郎氏、渡辺は、渡辺文雄氏）

仏 龕	年 代
山王山石仏 (隠れ地藏)	12世紀(西川)／12世紀後半(渡辺) 11世紀後半～12世紀前半頃(仲嶺)
ホキ第一群第二龕 (堂ヶ迫石仏)	11世紀(平安後期：西川)／11世紀後半(渡辺) 11世紀末(12世紀前半)～12世紀半ば頃(山王より少し遅く、古園大日に近い：仲嶺)
古園石仏群	11世紀(平安後期：西川)／11世紀後半(渡辺) 12世紀後半(久野健／賀川光夫＊五輪塔銘) 12世紀半ば～12世紀後半(仲嶺)
ホキ第二群第一龕 (ホキ三尊石仏)	11世紀(平安後期：西川)古園石仏群及びホキ第一群第二龕より やや遅い／11世紀後半～12世紀前半(渡辺)／12世紀前半(久野) 12世紀前半～12世紀半ば(又は12世紀後半：1150-70年頃：仲嶺)
ホキ第一群第一龕 (堂ヶ迫石仏)	12世紀(西川、古園より後、山王に近い時期) 12世紀後半(渡辺) 12世紀半ば頃～12世紀後半(仲嶺)
ホキ第二群第二龕 (九体阿弥陀)	12世紀後半～13世紀初頭(西川)／12世紀後半(渡辺) 12世紀後半～13世紀半ば頃(仲嶺)
ホキ第一群第三龕 (大日群) (堂ヶ迫石仏)	12世紀後半～13世紀初頭(西川)／12世紀後半(渡辺) 12世紀後半～鎌倉初期(仲嶺)
ホキ第一群第四龕 (地藏・十王) (堂ヶ迫石仏)	鎌倉末期～南北朝(西川)／13世紀(渡辺) 13世紀末(鎌倉末：仲嶺)(正安二1300年銘箱根地藏より古様、 320.5cm)
中尾五輪塔 (聖塔)	大塔：嘉応二1170年銘／小塔：承安二1172年銘 (＊覚鑿＊大日の三昧耶形＝五輪塔)
五輪塔参考作例	上醍醐御影堂(銅)：応徳二1085年／法勝寺鏡瓦：保安三1122年 成身院梵鐘中(陽鑄)：大治四1129年鑄造、長寛二1164年再鑄 平家納経：仁安二1167年／中尊寺釈尊院：仁安四1169年 福島岩法寺：治承五1181年
満月寺前多層塔	正和四1315年：阿闍梨隆尊が先師尊全と亡父母の為に阿闍梨日 秀に造立を命ず。 参考：大分市円寿寺五輪塔銘に正和五1316年(逸亡)

派系（円勢・長円、賢円など）、ホキ（第二群第一龕）三尊は院派系（院助、院覚、院朝、院尊など）、古園石仏は奈良仏師系（頼助、康助、康朝、成朝、康慶、運慶など）の流れを汲むものと推測される。

(3) 古園石仏群像

造立年代について、西川氏は十一世紀、渡辺氏は、十一世紀後半。一方、久野氏は、十二世紀後半。この説は、賀川光夫氏の五輪塔銘を根拠とされた説とも重なるが、自説では、十二世紀半ば（十二世紀後半）と推測している。

二 造立年代に関する自説の具体的根拠

(1) 山王石仏の造立年代（図1…三尊全体／図2…中尊横顔／図3…右脇阿弥陀顔）

最近、伊東史朗氏は、「幼児のような体格や面貌を特色とする作風が、定朝の父・康尙の様式に行く着くかに推考されること。またそれが、定朝とは違った和様を創出し、後世の造像上の規範の一つになっていたことが考えられる」と指摘された（伊東史朗「仁和寺北院薬師檀像について」『仏教芸術 一七七号』毎日新聞社 昭和六十三年）。

以上の点を考慮し、改めて山王石仏中尊を細見すると、その面貌は童顔でやや突き出た唇で表され、堂々とした重量感を伴う体軀などに、一種の古様さ（あるいは密教像的特徴）が窺える。様式から、西川氏は、古園石仏に遅れての開鑿で、平安後期の十二世紀とされた。しかし、管見では、康和五（一一〇三）年の仁和寺北院薬師檀像（円勢、長円作／図4／実はこの像は、すでに永保二（一一〇八）年の供養願文に見える旧本尊同様の白檀六寸像という）に見られるような裳懸座に結跏趺座し、童顔を特徴とする像容との類似性を持つこと（この点から、山王中尊には、円派仏師の系譜を想定することが可能）。およびこの位置は、石仏群全体を通じて、最も高くしかも奥に立地、つまり、まさしく聖域（奥院）と呼ぶべき山王山麓の磨崖に造営されていることなどから、白杵石仏群中では、最も古く開鑿

されたものと推測される。一見像容は荒く素朴には見えるが、視角・視距離や光の条件を変えながら精緻に観察すると、童顔の面貌に温雅さが窺える。また一木的古様さを温存させ、同時にポリウム感に富む。ちなみに、法量について、山王中尊と古園大日像とを比較すると、山王中尊は、像高二七一・七センチメートル、頂一顎九五・〇センチメートル、面幅六〇センチメートル・面奥九七・五センチメートル・面長五七・〇センチメートル。一方、古園大日像は、像高二八六・四センチメートル、頂一顎七九・〇センチメートル、面幅五八・四センチメートル・面奥九〇・〇センチメートル・面長五五・〇センチメートル。つまり、現状の山王中尊は、古園大日像に比べて、像高のみを除いて、いずれも最大値を示す。ただし、宝髻部が破損している古園大日像は、本来は山王中尊よりも高いものと考えられる。

ところで、この作風は、頭部表現で特に肉髻の盛り上がり不明だが、天台系にまます確認され、例えば六波羅蜜寺薬師坐像(図5)や京都岩倉長源寺薬師立像などの十世紀彫像にも窺えるので、山王中尊は、古園石仏やホキ三尊などにいくぶん先行する白杵石仏群草創期の作例と見ることは許されないだろうか。造立年代について、京都舞鶴円隆寺如来三尊(万寿年間一〇二四—二八年/右脇・説法印釈迦/中尊・来迎印阿弥陀/左脇・薬壺を持つ薬師)や京都大原来迎院如来三尊(天仁二(一一〇九)年/右脇・阿弥陀五九・四センチメートル/中尊・薬師八九・七センチメートル/左脇・釈迦五八・八センチメートル/図6)などを含めて勘案すれば、十一世紀後半(かなり末に近い)から十二世紀前半頃の間想定できないだろうか。かつて濱田耕作氏は、山王三尊を古園石仏群に比べて技術的に劣るという理由から、遅れた時代に置く説には賛成できないとされたが、その慧眼を高く再評価すべきではないだろうか。

(2) ホキ三尊(ホキ第二群第一龕)の造立年代

三尊とも厚肉に彫出し、丸彫に近い表現は、古園石仏群と近似。均整な体軀、温雅で円満な相好、巧みな鑿さばき、やや硬さはあるが定朝様を彷彿させる様式に畿内の藤原仏と見紛う程の格調高さが窺える(図7・三尊/図8・阿弥

陀顔／図9・観音顔)。脇侍菩薩のポーズと天衣の処理法は、鳥取大山寺阿弥陀両脇立像(天承元(一一三二)年／仏師良田)に最も近似する(図10・三尊／図11・勢至)。ホキ三尊中尊が定印で裳懸座像の可能性が高いので、この前提に基づき様式系譜を辿ると、次の三尊形式の作例が作風上近似する。①鳥取大山寺阿弥陀・両脇立像(天承元(一一三二)年)②滋賀金胎寺阿弥陀・両脇立像(康治元(一一四二)年／図12・三尊)③三千院阿弥陀・両脇正坐像(久安四(一一四八)年)。特に面貌表現に限れば、単独像の作例では、④京都法金剛院阿弥陀坐像(大治五(一一一三)年、待賢門院発願、院寛作、定朝様丈六像、図13・顔)が極めて近似する(この点からホキ三尊の仏師を院寛の作風を受け継ぐ系統と推測。なお院寛にパトロンとして深く関わった藤原忠実の存在にも注目すべきである)。

以上の類似作例との関連から、開鑿年代は、十二世紀半ば頃。つまり古園石仏群(十二世紀後半頃)よりやや早い時期に想定したい。ちなみに久野健氏も臼杵石仏群中最も早く、十二世紀前半頃の開鑿とされた(久野健『日本の美術 三十八・石仏』小学館 昭和五十七年)。

なお、莊園関連から造立年代を考える場合、新川登龜男氏の指摘の通り、関白忠通の家司・豊後守源季兼の意向と仲介により、忠通の妻・宗子建立の最勝金剛院に「臼杵荘・戸次荘」が寄進された蓋然性が最も高いことに注目する必要がある。ちなみに季兼は、豊後守として、保延五(一一三九)年八月に任命されたものと推測されるが、康治二(一一四三)年・久安四(一一四九)年十月二十八日までの在職が明確であり、宗子死去に際し、以後その仏事等の万事を奉行し、宗子建立(一一四八年)の最勝金剛院でもそれらを施行している(新川登龜男「豊後守源季兼論」『渡辺澄夫先生古稀記念事業会 九州中世社会の研究』昭和五十六年)。ともあれ、段階的に造営・整備されたものと推測される臼杵石仏群の各時期の成立の背景を探る場合、「臼杵荘・戸次荘」の最勝金剛院への寄進という事実はある時期の造営契機を探る上で、一つの最も有力な手掛かりになり得る。

(3) 古園石仏群の造立年代

菊田氏の報告によれば、実は一九九三年夏に、大日基壇前方の整地層の中から十二世紀半ばから十三世紀初頭と推測される遺物、すなわち土師器および大日に付随していたと考えられる裳懸座の一部が発掘された(図14)。以前から私は、古園大日像に裳懸座が採用されている可能性が高いものと密かに期待をしていた。すなわち、古園大日像は、藤原忠実の発願による造立と指摘される金剛峰寺大日坐像に極めて類似性が強い。この像は、天養元(一一四四)年発願、久安四(一一四八)年造立、八角裳懸座に坐す作例(図15)。元來は現存の阿弥陀像を除き五智如来の一具。しかし現在阿闍像と宝生像を欠失。武笠氏によると、仏師康助が制作した蓋然性が高く、しかも彼の本分は、定朝様の継承とその刷新にあるものと想定され、金剛峰寺大日坐像は、それに合致するものと説かれる。(武笠朗「奈良仏師康助と高野山谷上大日堂旧在大日如来像」『仏教芸術 一八九号』毎日新聞社 一九九〇年)

とにかく金剛峰寺大日坐像と古園大日坐像との共通点は(図15・金剛峰寺大日像/図16・古園大日像)、一に裳懸座、二に像容、三に五智如来一具としての配置にある(この点から作者は、奈良仏師系と推測)。あるいは、裳懸座と像容のみに注目すれば、根津美術館の大日坐像(図17/十二世紀前半)が、極めて類似性が強い。この画像は、旧中尊寺仏像の胎内納入品で、貴重な台密系の一例。私は、金剛峰寺大日彫像および根津美術館大日画像の他に類似性の強い作例群(大阪金剛寺金堂大日像・治承・養和一一七七一八二年間/同寺・多宝塔大日像・鎌倉初期/円成寺大日像・安元元(一一七五)年・運慶、図18/岐阜横蔵寺大日像・寿永二(一一八三)年・筑前講師作/奈良吉野大日寺五智如来像・十二世紀〈大日光背中に金胎種子〉/東京芸術大学蔵大日像・建仁三(一一〇三)年・快慶/金剛峰寺大日画像・鎌倉、図19)との関連と、一方出土品の示す年代を勘案した結果、古園石仏群は、十二世紀半ばから十二世紀後半頃の造立と推測したい。

三 尊名と配置

(1) 山王石仏

山王石仏という伝承に従うならば、根津美術館の山王本地仏曼荼羅図（鎌倉／図20）において、右脇に阿弥陀（聖真子）、中尊に釈迦（大宮）、左脇に薬師（二宮）を安置する作例に注目すべきである。ただし、表2のように、左は伝承（通説）、右は新説として問題提起したい。つまり、三尊の中尊の位置が、釈迦か、あるいは薬師かということ。新説では、中尊に薬師をあてたいが、その根拠は、一に来迎院如来三尊（天仁二（一一〇九）年）。すなわち、中尊・薬師、右脇・阿弥陀、左脇・釈迦を安置する形式にある。二に山王本地仏曼荼羅図において、中央の二宮（小比叡・大山作神）に薬師を安置する例（比叡山・生源寺本、鎌倉前半）が見られること。三に山王の場所が、ホキ三尊から見てほぼ東に位置すること。すなわち、薬師は東方瑠璃光世界の教主であり、ちょうど方位に合致する。四に天台との関わりに注目すれば、当然、比叡山根本中堂本尊が薬師であること。以上の四つの要素が尊名と配置の選定に関連するものと考えられる。

(2) 古園石仏群

*印以外は通説(谷口鉄雄氏/小野玄妙氏)に従い、*印は、今回私が提起する仮説。⑦を除けば、中央の△印大日を軸に左右対称の形式で、しかも順次内から外へ向けて、如来、菩薩、明王、天部という尊格の段階的展開と方向が意図されている。いわゆる曼荼羅の特徴として、中心があるが、古園石仏群の配置には、そのことが明瞭。②①△②①は、金剛界曼荼羅の成身会(根本会)に相当する。さらに曼荼羅の特徴として、交替性が挙げられるが、大日と釈迦、あるいは阿弥陀が互換可能。これは、覚鑿の密教思想を媒介にすると分かりやすく、すなわち、密厳浄土Ⅱ極楽浄土。大日Ⅱ阿弥陀という考えを導入し、大日の位置に阿弥陀入れると、普通その両脇には、観音と勢至が対置される。しかし、成身会との関わりを踏まえて、さらに通説では勢至と推測される尊像光背中にかすかに認められる種字(ダンと判読)を考慮するならば、無量寿(阿弥陀)如来の四親近(法・利・語・因)菩薩中に見られる金剛法菩薩(観音に対応・キリーク)、金剛利菩薩(勢至に対応・ダン)を示すものとも考えられる。ちなみに、この三尊形式の画像作例として、醍醐寺阿弥陀三尊像(図21・鎌倉)を挙げることができる。

一方、不動と地蔵が大日を中心にして左右に対置される理由は、次のように考えられないだろうか。つまり、不動と地蔵が大日の功德を分担するという説(采西、一一四一一二二五年・『菩提心別記』治承三(一一七九)年)、さらに、不動は大日の智慧の極(強剛の方便の至極)、地蔵は大日の慈悲の極(柔軟の方便の至極)という説(無住一円、一二二六一三三二年・『沙石集』)に基づけば、ある程度の説明が可能ではないだろうか。従来⑤について、降三世明王説があるが、尊像の精査を行えば、決して火炎光背を付けた怒髪の明王ではなく、むしろ舟形光背を背負っており、その上無髪の頭(脇頭なし/図22)が見える。したがって、この像は、地蔵とみる方が大過ないものと考えられる。

四 仏教思想と神仏習合

ところで、前述の金剛峰寺大日坐像は、武笠氏の指摘によれば、康助が制作した蓋然性が高い。ちなみに康助は、永久四（一一一六）年奈良中川成身院本尊の大日像をも造立しており、実はその成身院に覺鑿とも緊密な実範が止住したことが知られている。すなわち、榑田氏によれば、実範と覺鑿はほぼ同時代の人で、年齢差も大差なく、密教に精通、相互に交渉、かつ師資となり事教二相を究めたものという。従って、この両者の密接な交渉は無論のこと、一方、忠実本人および北御方の出家に際して、実範が戒師を務めている事実をも勘案すれば、成身院・実範と撰閲家との間も無視できない。事実、頼長も、実範とは親密であり、特に実範の示寂について、『台記』に天養元（一一四四）年九月十日と明記している（榑田良洪『覺鑿の研究』吉川弘文館 平成四年）。

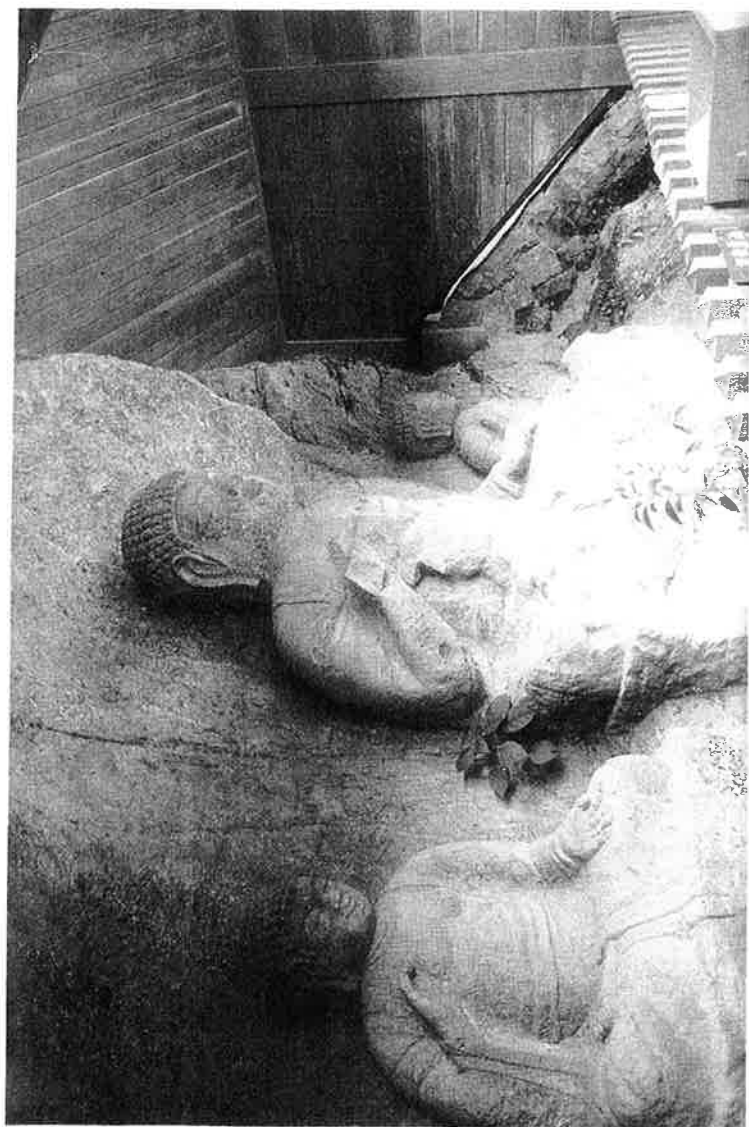
臼杵中尾台の五輪塔（大塔Ⅱ嘉応二（一一七〇）年銘／小塔Ⅱ承安二（一一七二）年銘）の意義を探る場合、その前後の作例に注目すべきだが（表1参照）、特に先例として大治四（一一二九）年鑄造銘かつ長寛二（一一六四）年再鑄銘の成身院梵鐘中に陽鑄された五輪塔は看過できない。実はこの五輪塔信仰は、覺鑿の密教思想と緊密であり、成身院と臼杵石仏との間には相即性が推測される。ちなみに覺鑿（一〇九五—一一四三）は、密教と専修念仏の一致を説き、密厳浄土即極楽浄土、大日即阿弥陀と考えた。中尾台の聖塔と呼ぶ五輪塔中には「如法経」の文字が確認されるが、これは覺鑿とも関わる当時の「如法経聖」たちの諸国勸進を行った形跡を示すもの。臼杵石仏群の成立事情を考える場合、特に法華經典書写・読誦・講経などの専念者、すなわち「如法経聖」に注目すべきである。特に高野山再興期には、高野山の浄土教形勢の主体であった興福寺系の聖の活躍が指摘されている（『井上光貞著作集 第七巻 日本浄土教成立史の研究』岩波書店 一九八五年）。

次に、神仏習合との関わりにおいて、前述の山王（日吉）信仰が焦点になる。ここで少し興味深い事実を挙げよう。

大分市に分布する山王神社は、特に天台の靈山寺周辺の高瀬、西寒多、あるいは高城から丹生川周辺に集中している。さらにその延長線上に、上戸次と臼杵との接点に位置する日吉社（最勝金剛院領「臼杵荘・戸次荘」との関連か）、そして臼杵山王社へと連結。このような分布には、何か深い理由がありそうだが、例えば、その背景には豊後武士団大氏の勢力伸張と同時に、天台の宗教的意図も潜んではいないだろうか。ともあれ、山王信仰が浸透する何らかの必然性を持っていたものと推測したい。既述のように、山王三尊の成立基盤には、山王本地仏曼荼羅との緊密性を重視する必要がある。特に薬師は、比叡山根本中堂の本尊かつ現世利益の（靈験厚き）仏でもあり、一方、神仏習合との関連では、本来の山神である大山咋神（二宮／小比叡）に相当する。要するに岩山に刻出された初期臼杵磨崖仏群の背景には、山の神と薬師との習合を導入した天台の山王信仰を重ねて見ることも極めて有効ではないだろうか。

図版出典

- 1 山王三尊坐像／2 山王三尊中尊／3 山王三尊・右脇阿弥陀／7 ホキ(第二群第一龕)三尊像
- 8 ホキ三尊・中尊阿弥陀坐像／9 ホキ三尊・左脇観音像／16 古園石仏群大日坐像／22 古園石仏群地藏頭部
(＊以上、筆者撮影)
- 4 仁和寺北院薬師檀像／13 京都法金剛院阿弥陀坐像／18 奈良円成寺大日坐像(＊以上、京都国立博物館編『院政期の仏像』岩波書店 一九九二年)
- 5 六波羅蜜寺薬師坐像(『古寺巡礼 京都25 六波羅蜜寺』淡交社 昭和五十三年)
- 6 大原来迎院如来三尊像(『日本古寺美術全集 第九卷 神護寺と洛西・洛北の古寺』集英社 昭和五十六年)
- 10 鳥取大山寺阿弥陀三尊像／11 鳥取大山寺阿弥陀三尊・勢至像(＊以上、『日本彫刻史基礎資料集成・造像銘記篇三 図版』中央公論美術出版 昭和四十二年)
- 12 滋賀金胎寺阿弥陀三尊像(『仏像集成4 日本の仏像(滋賀)』学生社 昭和六十二年)
- 14 古園石仏群中央部(飯沼賢司氏撮影)
- 15 金剛峰寺大日彫像／17 根津美術館蔵・大日画像／19 金剛峰寺大日画像／21 醍醐寺阿弥陀三尊画像(＊以上、『密教美術大観 第二巻』便利堂 昭和五十九年)
- 20 根津美術館蔵・山王本地仏曼荼羅図(関口正之『日本の美術』二七三 垂迹画)至文堂 一九八九年)



山王三尊像 1 図



図2 山王三尊・中尊 葉師坐像



図3 山王三尊・右脇 阿弥陀坐像

磨崖仏の世界



图4 仁和寺北院 薬師檀像

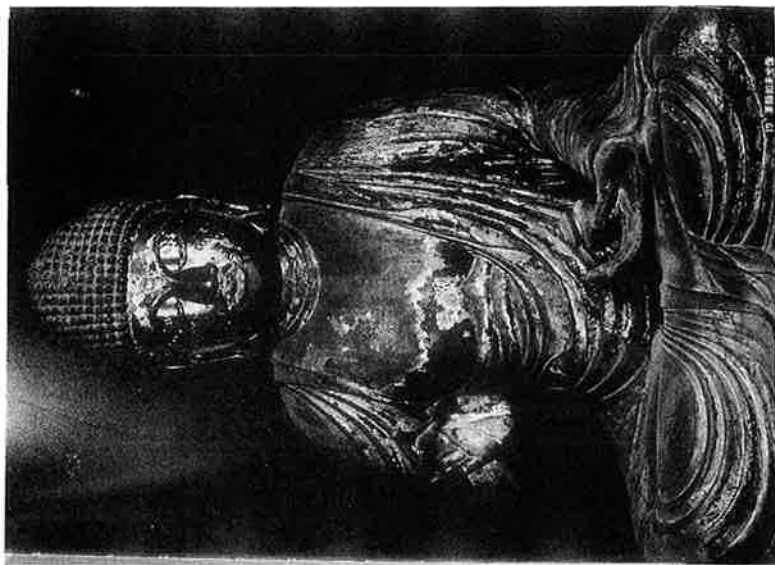


图5 京都六波羅蜜寺 薬師坐像



图8 木牛三尊・中尊 阿弥陀坐像



图7 木牛三尊像



図 6 京都大原来迎院 三尊像



図9 木井三尊・左脇観音像



图11 鳥取大山寺 阿弥陀三尊脇侍勢至像



图10 鳥取大山寺 阿弥陀三尊像



図12 滋賀金胎寺 阿弥陀三尊像

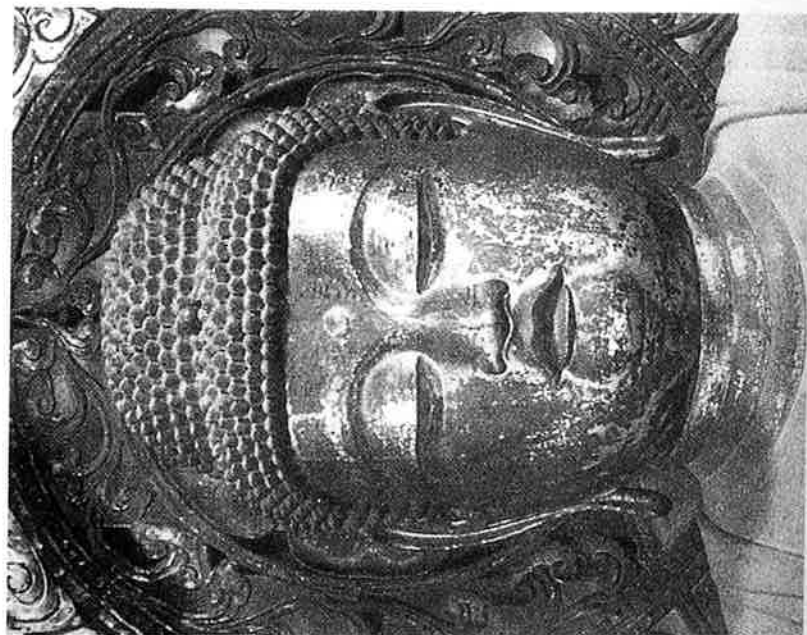


图13 京都法金剛院 阿弥陀坐像

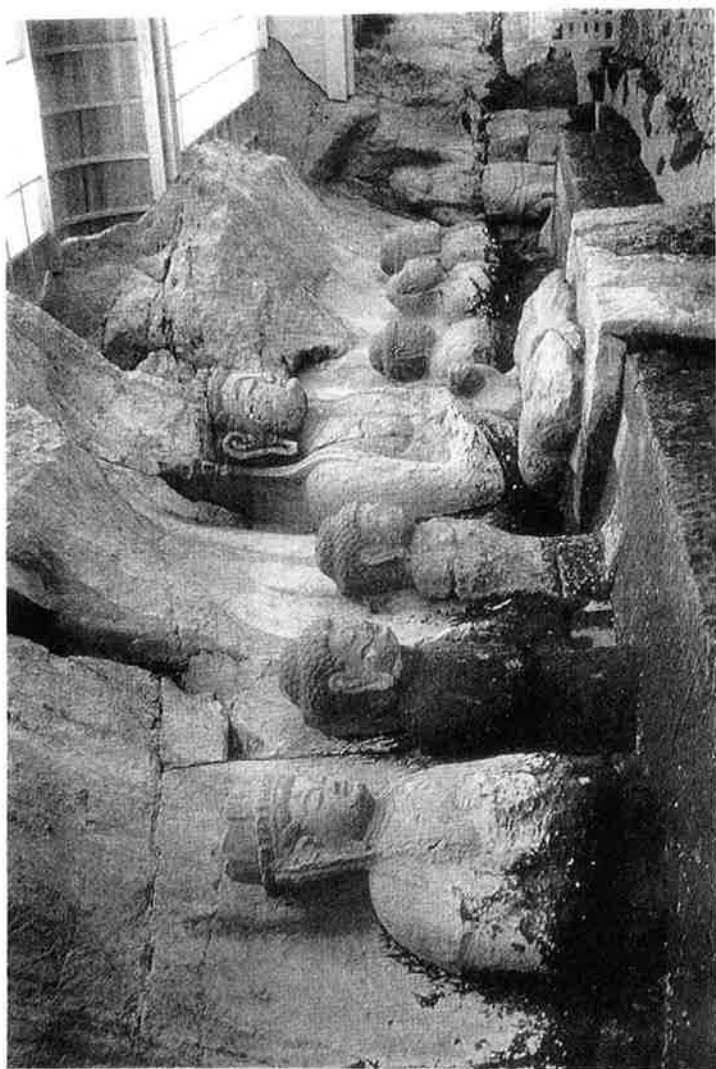


図14 古園石仏群中央部

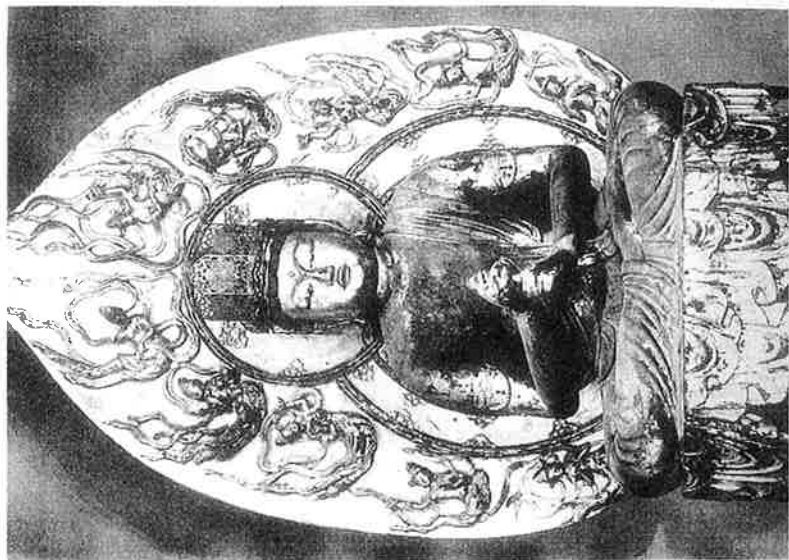


图15 金剛峰寺 大日彫像 (旧金剛心院・谷上大日堂)



图16 古園石仏群大日坐像



図17 根津美術館蔵 大日画像

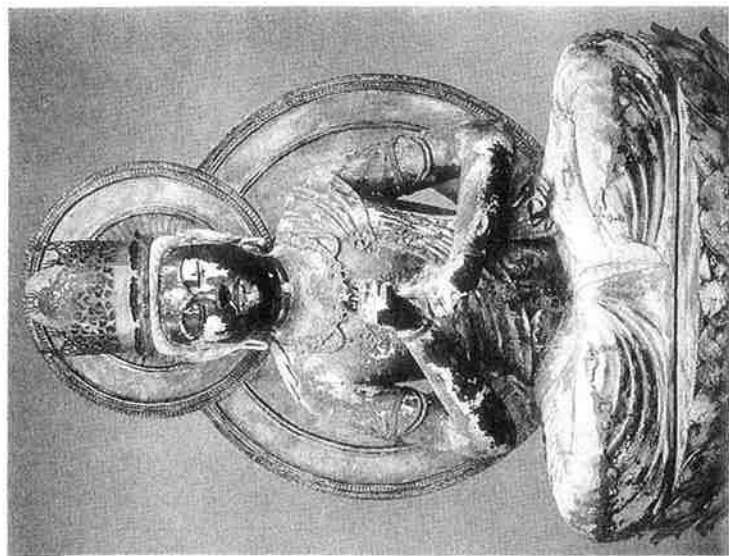


図18 奈良円成寺 大日坐像



图19 金剛峰寺 大日画像

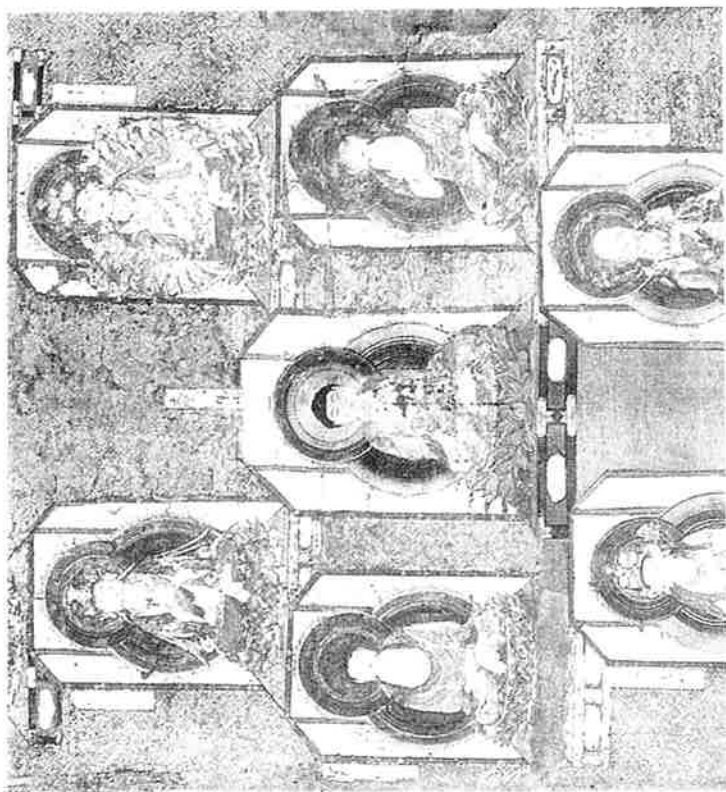


図20 根津美術館蔵 山王本地仏曼荼羅図

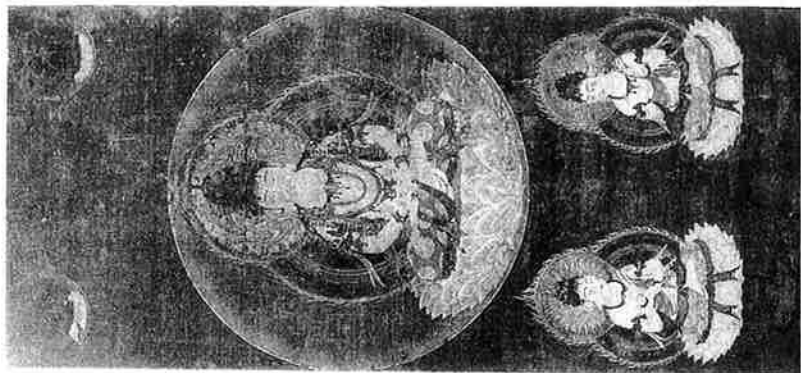


图21 醍醐寺 阿弥陀三尊画像

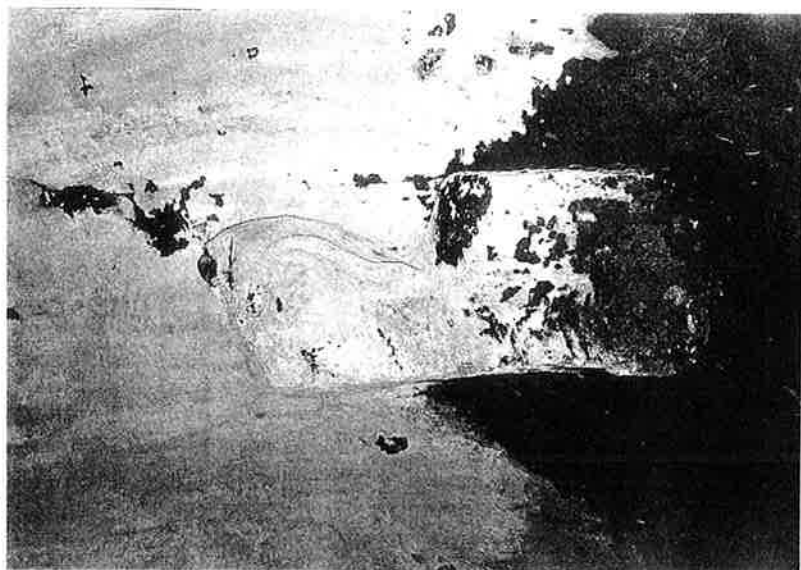


图22 古園石仏群 地藏頭部